

# 学道一如

発行 小樽双葉高校  
学生会通信  
2025年12月8日  
第45号

## 全日本中学生・高校生管打楽器ソロコンテスト 坂本実咲さん、柴田桃花さんが全道へ

JBA（全日本中学生・高校生管打楽器）ソロコンテストの全道出場者の予選が音源審査で行われた。約百名の中から40名が選ばれ、その中に2・4坂本実咲さんと1・1柴田桃花さんが入った。12月20日に北広島市で全道大会が開かれる。その抱負を聞いた。

### 自分の表現に磨きを

坂本実咲さん

ユーフォニアムで「英国の讚美歌による変奏曲」（フイリッポ・スパーク作曲）を演奏した。本来は7分の曲だが、4分にカットして演奏した。「どれだけ聴衆に自分の表現したいことを伝えられるかを意識している。曲はゆっくり歌うように吹く部分と速い動きで活弁に吹く部分があり、その差をしっかりと表現したい。全国目指して、良い演奏ができるように練習する」



坂本実咲さん

と述べている。

### 課題を克服し金賞を

柴田桃花さん

トロンボーンで「Fantasy for Trombone」（ジェームズ・カーナウ作曲）を演奏した。最初はゆったりと、やがて細かい動き、速いテンポになる。トロンボーン特有の豊かな音色と細かい動きのときははっきりとした音色のコントラストがあり、最後はたたみかけるように盛り上がり、終わる。「演奏で歌うのは得意



柴田桃花さん

### 小樽再発見②

## 稚内、樺太、旭川、そして東京へ

旭川在住の坂井勝さん（小熊秀雄賞の実行委員）から「小熊秀雄は小樽で生まれました。：小学校しか出ていない小熊が様々な知識を得たのは川上呉服店の店員として働いた時だと言われています。二十歳。店主に可愛がられ、店主の数多くの蔵書を読みふける毎日だったそうです。：とお便りをいただいた。「小樽出身の小熊秀雄」について調査を開始した。

### 小熊秀雄の生涯

小熊秀雄は、明治34年、小樽区稲穂町10番に生まれました。



小熊 秀雄



双葉歴史探偵事務所  
□10□

現在の文学館の向かい辺りになります。幼いころ、稚内から樺太に移り、現地の小学校を卒業後、漁師、養鶏場や炭焼きの作業員、農夫の手伝い、伐木やパルプ工場の雑役などに従事、ほとんど独立の生活を営んだそうです。

旭川新聞の記者をしながら童話や詩を書いていきましたが、昭和3年、妻子を連れて上京。翌年から池袋に近い長崎町に住み、その後、町内を転々しました。生活は困窮を極めました。プロレタリア詩人会に入り、次々と作品を発表しました。昭和8年、小林多喜二虐殺後、プロレタリア文学陣営が次第に沈黙がちになってから、むしろ小熊秀雄の本領が発揮され、雑誌『詩

ではないが、感情を込めて演奏し、速いところでスライドとタニンクの動きを合わせるよう努めたい」と語る。提出した音源の自己評価は60点と、まだ伸びしろがある。「ライバルは沢山いる。まずは金賞を目指したい」と語る。

二人とも谷津祐子先生のピアノ伴奏で演奏することになる。

精神」などに、「同志」に対してより痛烈な風刺詩を書きまくったのです。

「私は、いま幸福なのだ／舌が廻るといふことが！／沈黙が卑屈の一種だといふことを／私はよく知つてゐるし、沈黙が、何の意見を／表明したことも／ならない事も知つてゐるから。」（しやべり捲（ま）くれより）

小熊秀雄の住んだ長崎町には、アトリエ付きの小さな貸家がたくさん建てられ、「アトリエ村」と言われました。自分でも独特のペン画を得意とした小熊は、若く貧しい画家たちと親しくなり、彼らが集う池袋を、パリの芸術家の街になぞらえ「池袋モンパルナス」と名付けました。

貧乏暮らしが続く、結核の病状も進行。さらに左翼系文学雑誌の廃刊が相次ぎ、作品発表の場も失つていった小熊秀雄は、昭和15年11月、小さなアパートの自室で、眼を見開いたまま39年の生涯を終えました。

「あ、夢は去らない、／びつしよりと汗ばみながら／いらいととした眼で／前方を凝視（ぎょうし）する。」（「夜の床の歌」より）

空疎なおしやべり、無鉄砲なドン・キホーテとも批判された小熊秀雄。けれども彼の「おしやべりな詩」は、今でも私たちを力づけてやみません。

（広報おたる平成19年5月号より抜粋）

小熊秀雄はどんな人物だったのか、どんな作品を残したのか、また、小樽での生活、その後の人生にどんな影響を与えたのかについて調べてみる。